2. 「難民を助ける会から見る難民支援の 40 年」

柳瀬房子（AAR 会長）

柳瀬　皆さん、こんにちは。難民を助ける会（AAR）の柳瀬でございます。

皆さん、ちょっと想像してみてください。今から 40 年前。電話はありましたが、ケータイはありません。海外に行った人たちと連絡するのは」すべて手紙でした。ですからこちらから手紙を送ると 1 週間を経て向こうに着く。ちょっと考えながら向こうから返事が来ると、もうそこで 3 週間経っている。「マラリアになった」というのを読んで、「大丈夫？」と言おうと思っても、もうこちらから手紙を送った頃には治っているというような日々でした。

また、海外送金がなかなかできませんでした。派遣する人に対しては、大金を持参して出発してもらいました。そしてどうしても緊急事態のときには、外務省にお願いして、「大使館からちょっと貸していただけませんか」というお願いをしたことも 2 度、3 度ではなかったような記憶がございます。

私は当時、テレックスを使っていました。テレックス、知っている人。あ、やはりだいぶ年齢が上の方ですね。テレックスは電話回線を使った通信システムです。縦横高さが 30 ㎝くらいの機会の箱の前にキーボードがついていて、紙テープが挟まれていて、パンチを入れて機会を通しそれぞれが読み取るという。ちょっと分かりにくいですね。かなり高価なものだったと思います。

また、国内で募金は、ほぼ現金書留です。その中のお手紙にいろいろな心情が語られてあったことを、今でも覚えております

そのような時代に難民を助ける会は産声を上げました。先ほど、相馬雪香さんがこの会を創設したことを申し上げましたが、その発起人のメンバーにはこの上智大学のピタウ神父さまも参加されて、一緒に活動をいたしました。

当時は、UNHCR や赤十字は活動していましたが、直接的な支援としてはカリタス、天理教、日本赤十字、立正佼成会など宗教団体の地方の支部が難民の保護をしていました。

AAR のように政治も宗教も後ろ盾のない市民団体で、しかも役所や企業や政治家といろいろ連絡を取ることができたという団体は他にはありませんでした。当時の AAR の活動の一部を紹介します。

① これがベトナムからのボートピープルの写真です。UN の提供です。1975 年 1 月 1 日から 1979 年末の 5 年間に、朝日新聞では 581 回、読売新聞では 950 回、「インドシナ難民」という記載が取り上げられています。他のメディアも含めると、毎日 1 回はどこかの新聞には、日々「インドシナ難民」という言葉が言われていた時代です。

② はマレーシアのビドン島に上陸した難民の人たちです。

③ は兵庫県姫路市にできたアジア福祉教育財団難民事業本部が運営を始めた難民定住促進センターですベトナム難民が居住していました。ほとんどの人が米国かオーストラリア欧州に行きたい旨希望を出し、許可を待っていました。この 2 人は後に AAR の奨学金生として頑張った方です。

④ 街頭募金活動も始めました。大勢で行いました。ひとり二人では怪しまれますので。ところが新聞の切り抜きなどを持ち個別訪問するなど偽物が出てきまして、その後、特別な機会を除き街頭募金はやめました。

⑤ タイとカンボジアの国境の難民キャンプです。ラオスやカンボジアからの人々です。狭い地域にひしめき合って滞在していました。何万人という人々が逃れてきました。50%は子供です。AAR が派遣した最初のころのボランティアです。救援物資の配布や、保育、教育の手伝い、遊び場を作り、次第に日本語教室や職業訓練、パソコン教室と変化して行きました。また、日本では、難民キャンプに行って手伝いたいという人々に、行くためには何が必要かという講義も度々行いました。自分は短期間しか無理だが、健康な体力と、助けたい気持ちはだれにも劣るものではないという人に対して、先ず語学、次に時間８（少なくてもひと月以上、許可書をとるのに１週間はかかるので）何かの専門性をつけること。等々伝えて・・・。まだそのような時代でした。

⑥　難民キャンプでは衣類が足りませんでした。いくらでも必要ということで、日本中で 100 万人に衣類を送るキャンペーンを始めました。大変多くの協力が集まり結局 1165 万トン。1983 年に届きました。

このときにAARは、ダンボール1箱につき500円の輸送費をつけてください、という依頼をしました。つまり、「お金がないとモノが運べないし配布もできないでしょう」と訴えたのです。「洋服寄付するのにお金を払うの？」と言う人が大勢いました。「よろしくお願いします。実際に難民キャンプできちんと配布します。報告もします。運搬費や人手、通関の経費から倉庫の費用など、諸々かかります」と理解いただきました。いくら善意の物品であってもAからBへはただでは動かないということを知っていただく機会になったと思います。また、そのまま送ったら失礼だと思うような汚れたものも多く含まれていたことも事実です。その倉庫での整理も、多くのボランティアの方が関わってくださいました。

⑦ これは東名高速の横浜から降りた16号線沿いの集積所です。荷物を積んだトラックが行き交い、ハラハラしておりました。

⑧ 届いた品物を相馬会長がキャンプの代表に渡す式です。配布に立ち会いました。こういった記事を全部、新聞社も取り上げて報告しました。

⑨ 衣類よりも、その前に始めたのが、メガネのプレゼントです。カンボジア難民に日本からのプレゼント。これは最終的には 6000 個以上になりました。私たちは、日本人の方たちにも難民のことを一緒に考えてもらえるような活動をしたいと常に考えていました。

カンボジア人は、メガネをかけていると知識層と見られて殺されました。みんな殺されてしまったのです。ですから、逃げるときにメガネを捨ててきた。その情報の元実際にメガネを贈りました。日本で呼びかけに応じた使用済のメガネは全日本眼鏡連盟の小柳重隆会長が会員に呼び掛け、総て計測し度数を測り、洗浄し一つひとつケースに入れてメガネ拭きもそえて届けました。キャンプでアメリカ人の眼科医を雇用し、合うメガネを渡しました。「サインができるようになった」「縫い物ができるようになった」と、本当に喜ばれました。

⑩ この写真は、表札です。「難民キャンプに別荘を建てませんか」と呼びかけ、1 軒 2 万円で寄付した方の表札をつけて、建物を建てました。いつまでもテント暮らしはできません。計 220 軒 1,000 人以上の方の住まいができました。東京村と命名し、贈呈式をしました。

⑪ タイの難民キャンプに「車椅子 180 台」です。1988 年ですが最初は日本から車椅子を持っていきました。まず見本をばらして作り始めました。私は贈呈式に参加したのですが、忘れられない記憶があります。セレモニーの前に参加者の集合が遅いと会場の前で待っていたのです。誰も見えません。遠くにから砂埃が見える。「野良犬かしら」と緊張しました。実は人でした。汚れた布を纏い土埃の中を膝行（いざ）りながら、四方から人々が集まってきました。家族に戸板で運ばれてきた人も

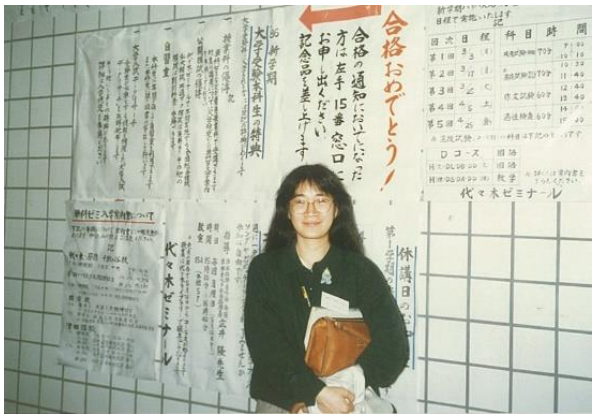
います。車椅子をとっても喜んだことは言うまでもありません。帰る姿に自分が情けなかったです。日本で集めた車椅子です。早く地元で作れるように応援したいと思いました。

⑫ AAR では 80 年代初めから、日本に定住した難民の方々に対して、日本語教育や補完教育を始めました。なぜ難民として海外に逃れたかを考えますと、それは自由を求めてです。自由に勉強したい。自由に働く場所が欲しい。自分たちの国は自由がなくなってしまっている。なんといっても自由に勉強したいということが一番の目的です。そして子どもにはきちんとした自由な環境の下で教育を与えたい。ボートピープルになるのは、本当に命と引き替えです。それでもそうやって逃れてきた。ですから、本当に熱心に勉強に励んでおりました。

ボランティアの先生方が大勢参加してくださり、これが現在の社会福祉法人さぽうと 21 に、引き継がれております。

⑬　この右側の男性はベトナム難民です。AAR の奨学生でした。数学でしょうか熱心に教えています。

⑭ こちらはトラン・ゴク・ランさんです。定住インドシナ難民で、最初に医師になった方です。彼女の一家はボートピープルでした。両親、兄弟が別々のボートでベトナムを脱出して、日本に留学していた兄を頼って来日しました。一言でいうとそのような紹介になりますが、大変なドラマを背負っています。



⑮　これは通称ベトコン塾です。ベトナムコンピューター塾です。一番手前に写っている、指を差している人は、先ほど最初に見せた姫路の難民定住促進センターにいた青年です。真ん中が吉田敦さんです。東工大の大学院生で AAR のボランティアです。本日お渡しした『日本発国際 NGO を創った人たちの記録』という、このインタビュー集の中に吉田敦さんの記録が出ています。パソコンが流通し始めたばかりで、普通の学生たちは、研究室に行って順番を待って、限られた時間だけやっと触ることができるという時代でした。

難民奨学生には理系が多かったのですが、大変高価なパソコンは入手不可能でした。AAR で何とか 2，3 台入手し、みんな交代で事務所に触りに来ます。本当に一晩中触っているのですね。帰ってくれないのです。朝起きて事務所に入ると、この人たちがいるんですよ。その成果が、なんと、ベトナム語のワープロを自力でつくりました。この２人の留学生と書いてありますけれど、難民の人たちです。留学

生扱いで大学に入学することができましたので、こういう表現になっておりますけれども。パソコンでベトナム語のワープロ。隣で吹浦がアルファベット表記のワープロで書類を作っていました。それが日本語に文字化するのを見て、「これはベトナム語のワープロもつくれるのではないか」とがんばって発明したのです。

⑯ アフリカのザンビア、メヘバの難民キャンプです。ベトナム難民のダット医師です。もともとベトナムで医師でした。ボートピープルで来日し 3 年間、医師国家試験を頑張りましたが、無理でした。そこで AAR からザンビアの難民キャンプに派遣しました。同時に日本人の医師も派遣していました。日本人医師は、検査が何もできない状況で医薬品も限られ、自分は何も役に立てないと自信を失い一月も仕事ができず帰国しました。他方ダットさんは、お産から子どもからマラリアの診断や、外科まで何でもこなせました。皆から尊敬され、現地の人たちと仲良く、一番右ですけれども、笑顔ですね。結局、英国の医師免許を与えられました。ですからその後日本では無理でも、今も、世界中で活躍しています。

⑰ これはリヤカーです。難民キャンプは広くて、作物を作っても運搬手段がない。頭上にのせて運ぶだけで少量しか載せられません。AAR が派遣した人たちが、リヤ

カーを思いつきタイヤを日本から送りました。自転車のタイヤなどで試したのですがすぐパンクしてしまいます。キャンプ内の職業訓練所で、難民にリヤカーつくりを指導しました。60 台作り難民キャンプで貸し出しをしました。レンタルリヤカーをつくりました。作物だけでなく病人や、時には亡くなった方を運ぶのにも利用されたと聞きました。

⑱ この写真は、「アフリカに毛布をおくる会」の活動です。森繁久彌さんが会長になり、吹浦が実行委員長になりました。この毛布は 173 万枚。4t トラック 7800 台分。配布終わるのに 2 年半かかりました。全部モニターをつけ報告しました。エチオピア、モザンビーク、ジンバブエ、スーダンなど配布して、その当時行ったが、栄養失調が多く「お婆さんが寝ていると思ったらじつは 10 歳の女の子だった」という痛ましい報告をしてくれたのを、今でもよく覚えています。

⑲ これが集まった毛布を外国へ送ったところです。

⑳ これはカンボジアで 1992、1993 年の頃でしょうか。ようやく平和になったカンボジアで学校をつくり始めました。ところがまだ技術者もなにもいません。今はお金さえ出せば学校がつくれます。ところがなにもない時代です。そこでまずセメントを買って資材置き場に保管すると次の日は全部盗まれる。砂利を買ってくると次の日全部盗まれる。そのためにそれらを補完する倉庫をつくる。そのためにガードマンを雇うという状態で、大変な時代でしたが次第に専門家も訪れ、本格的な建築が創られて行きました。

㉑　「愛のポシェット運動」です。これもポシェットに 1 人 500 円ずつ寄付してくださいねということで、配布するための費用をお願いしました。これはじつは、先ほど発表した吹浦さんは、昭和 23 年頃、日本の戦争が終わって 3 年くらいした頃に、アメリカ赤十字から、「可哀そうな日本の子どもたちに」とギフトボックスが贈られ、受けっとった一人でした。箱の中にはアメリカの高校生が集めたきれいなリボンやヘアピンや定規だとか、良い香りのする石鹸が入っていて文化の香りがしたそうです。40 年を経ても 50 年を経ても忘れられないという話をヒントに、日本からもカンボジアの子どもたちに「やっと平和になって良かったね」という思いを込めて「愛のポシェット」を送ろうと企画しました。ここに再現してもらって持参しました。こんな袋です。こういう袋の中にノートやタオルや石けんや、いろいろなものを入れました。何年か継続しましたが、立正佼成会の皆さんの応援は、大きいものでした。一つひとつにお願いした 500 円の輸送費をつけて大量に送っていただき当会の活動を支えて頂きました。改めて感謝します。ガールスカウト皆さんも AAR が止めてからも独自にアフガン難民キャンプに送るルートを作り継続されていました。

㉒　ミャンマーの孤児院の子どもたちです。

㉓　これは旧ユーゴの子供たちへも届けました。受け取った子どもたちは一度受け取ったものを決して離しませんでした。

㉔　日本に定住した難民の人々に少しでも仲良くなれるよう運動会をしたりしました。

㉕　東京ディズニーランドへの遠足。学校のクラスメイトはみんな行ったことがあります。「自分たちだけ行ったことがない」と勉強に来ていたベトナム人の子どもに気付かされました。初めての東京ディズニーランド。全部定住した難民の家族です。「その後何度か行きましたが、あんなに感動したことはありません」と今でも話題になります。

㉖　インドシナのサッカー大会。

㉗　運動会

㉘　グエン・ティ・ジャンさん。今でも二子玉川でベトナム料理店をやっています。彼女を育てました。応援しました。

㉙　東京地雷会議。

㉚　ピアニストの中村紘子さん。チャリティコンサートに何度も出演していただいて。お亡くなりになりましたけれども、こういう超一流の演奏会をすることで、NGOの、ある意味での信用を得ることができました。コンサートには度々、皇室の方もご臨席くださいました。

大急ぎで 80 年代、90 年代の一部をご紹介いたしました。ありがとうございます。

人見　柳瀬さん、ありがとうございました。まさに AAR、さぽうと 21 がさまざまな活動をされてきたということがよく分かります。メガネのことや車椅子のことから、ベトコンというちょっとドキッとするような名前ですけれども、コンピュータでベトナム語をつくるというのはすごいですね。ありがとうございました。

3 番目は寺本信生さんからお願いしたいと思います。すでに何度か名前が挙がっておりますけれども、元難民事業本部[2]の定住支援センターの施設長を務められました。長く現場にいらっしゃった方です。よろしくお願いします。

[2] 難民事業本部（RHQ：Refugee Assistance Headquarters）